

診療情報管理士への期待 ～学会から思うこと～

上 田 京 子

独立行政法人国立病院機構 仙台医療センター
情報管理課 診療情報管理室 室長
分類小委員会委員

第31回日本診療録管理学会学術大会が9月15、16日に秋田市で開催され、1,169名の方々—医師、看護師、診療情報管理士等多くの職種の方々—が出席され、盛会であった。今年の大会のメインテーマは「21世紀の診療情報管理を考える～個人情報保護法施行を見据えて～」であった。本年4月に個人情報保護法が施行され、患者の自己コントロール権が法的に確立した。そのことを踏まえた医療機関の対応の一つに、診療録管理並びに診療情報管理があげられる。それは患者の視点に立ち、院内ばかりではなく、地域医療連携を考慮した管理も含まれるものでなければならない。2題のシンポジウム「地域医療と診療情報」「個人情報保護法施行と診療録の管理」では診療情報の共有化と利用・活用を含んだ活発な討論があり、特に地域との関わりの重要性にこれからの診療情報管理士の責任の重さを感じた人も多かったに違いない。DPCを始めほかの多くの演題においても、診療情報管理士の役割を意識する発表が多く見られた。これは各医療機関が診療情報管理士に期待している内容が濃くなってきていることの現れであると思われる。自分たちがしなければならないことが何であるのか、自分たちができることは何であるのか、できなければならないようにするには何をどのように変えていかなければならないのかを考えていく必要がある。「医療の質の向上」と言葉では簡単に言えるが、この実践もクリティカルパス、臨床指標評価など多岐にわたるものであり、一言では済まされないものである。私たちは実力を身につけ、その期待に十分に答えられるよう研鑽を積み重ねていかなければならない。

大脳にある「海馬」は情報が必要か不要かを判断するところ、すなわち情報の整理を行うところ、記憶を扱っていて可塑性に最も富んだところである。6時間以下の睡眠では脳の成績がすごく落ちると科学的に証明されたとのことである。眠っている間に考えが整理されるとのことである。食欲の秋、読書の秋、多忙な秋、色々なことがある秋であっても睡眠はしっかり取って元気に過ごしたいものである。